

特 259

392

三體千字文

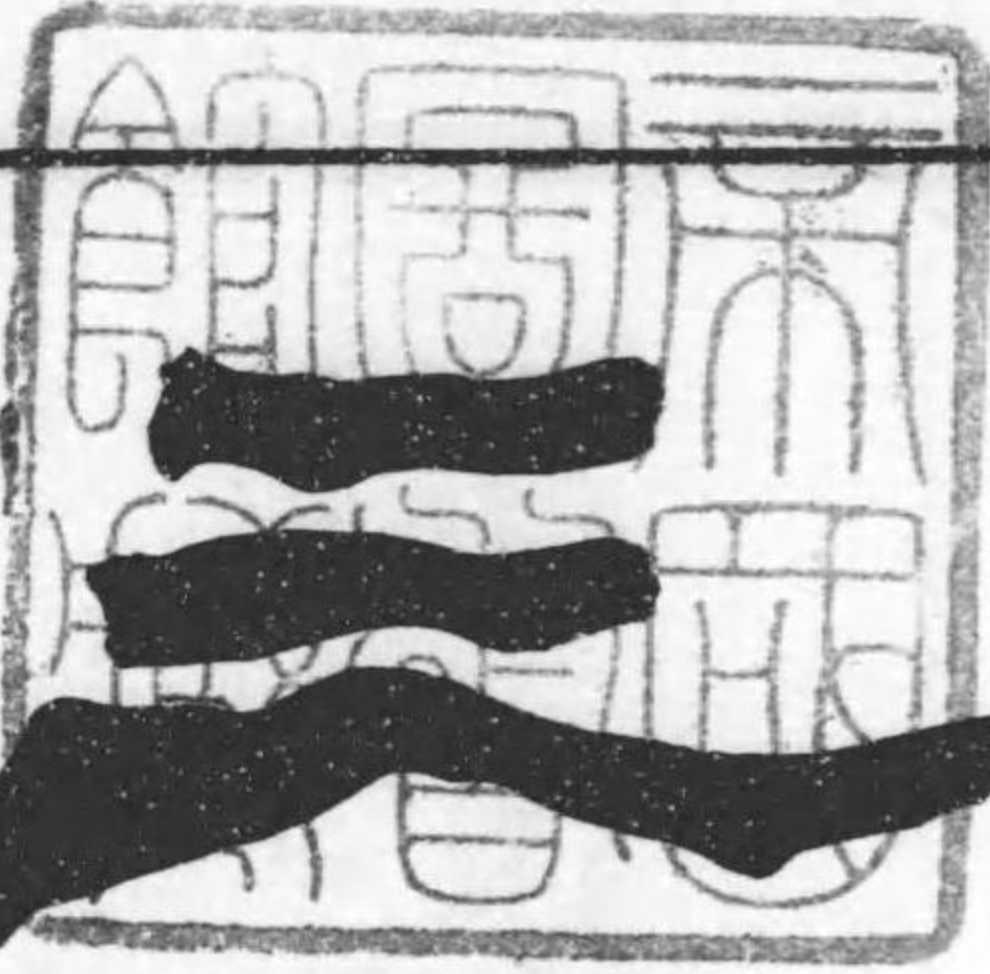
并裝書

6 7 8 9 6^m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7^m

始



特 259
392



丙寅之月

三體字

年義居之書



千字文

梁貞外散騎侍

郎周興嗣次韻



天地玄黃宇宙

天地玄黃宇宙

天地玄黃宇宙

洪荒日月盈昃

洪荒日月盈昃

洪荒日月盈昃

辰宿列張寒來
辰宿列張寒來
辰宿列張寒來

暑往秋收冬藏
暑往秋收冬藏
暑往秋收冬藏

閏餘成歲律呂

閏餘成歲律呂

至餘成歲律呂

調陽雲騰致雨

調陽雲騰致雨

調陽雲騰致雨

露結為霜金生

露結為霜金生

露結為霜金生

醴水玉出崑岡

醴水玉出崑岡

醴水玉出崑岡

劍號巨闕珠稱

劍號巨闕珠稱

劍號巨闕珠稱

夜光菓珍李柰

夜光菓珍李柰

夜光菓珍李柰

菜重芥薑海醜

菜重芥薑海醜

姜重芥薑海醜

河淡鱗潛羽翔

河淡鱗潛羽翔

河淡鱗潛羽翔

龍師火帝鳥官

龍師火帝鳥官

龍師火帝鳥官

人皇始制文字

人皇始制文字

人皇始制文字

乃服衣裳推位
乃服衣裳推位
乃服衣裳推位

讓國有虞陶唐

讓國有虞陶唐

讓國有虞陶唐

弔民伐罪周發

弔民伐罪周發

弔民伐罪周發

殷湯坐朝問道

殷湯坐朝問道

殷湯坐朝問道

垂拱平章愛育

垂拱平章愛育

垂拱平章愛育

黎首臣伏戎羌

黎首臣伏戎羌

黎首臣伏戎羌

遐迹壹體率賓

遐迹壹體率賓

遐迹壹體率賓

歸王鳴鳳在樹

歸王鳴鳳在樹

歸王鳴鳳在樹

白駒食場化被

白駒食場化被

白駒食場化被

草木賴及萬方

草木賴及萬方

草木賴及萬方

蓋此身髮四大

蓋此身髮四大

蓋此身髮四大

五常恭惟鞠養

五常恭惟鞠養

五常恭惟鞠養

豈敢毀傷女慕

豈敢毀傷女慕

豈敢毀傷女慕

(十五)

貞絜男效才良

貞絜男效才良

貞絜男效才良

知過必改得能

知過必改得能

知過必改得能

莫忘罔談彼短

莫忘罔談彼短

莫忘罔談彼短

靡恃已長信使

靡恃已長信使

靡恃已長信使

可覆器欲難量

可覆器欲難量

可覆器欲難量

墨悲然染詩讚

墨悲然染詩讚

考心孫海詩漢

羔羊景行維賢

羔羊景行維賢

羔羊景行維賢

剋念作聖德建

克念作聖德達

刻造心望後建

名立形端表正

名立形端表正

名立形端表正

空谷傳聲虛堂
空谷傳聲虛堂
空谷傳聲虛堂
空谷傳聲虛堂

習聽禍因惡積
習聽禍因惡積
習聽禍因惡積
習聽禍因惡積

福緣善慶尺璧

福緣善慶尺璧

福緣善慶尺璧

非寶寸陰是競

非寶寸陰是競

非寶寸陰是競

資父事君曰嚴

資父事君曰嚴

資父事君曰嚴

(114)

與敬孝當竭力

與敬孝當竭力

與敬孝當竭力

忠則盡命臨深

忠則盡命臨深

忠則盡命臨深

履薄風興溫清

履薄風興溫清

履薄風興溫清

似蘭斯馨如松

似蘭斯馨如松

似蘭斯馨如松

之盛川流不息

之盛川流不息

之盛川流不息

淵澄取映容心

澗澄取映容心

澗澄取映容心

(廿五)

若思言辭安定

若思言辭安定

若思言辭安定

篤初誠美慎終
篤初誠美慎終
考初慎美慎終

廿六

宜令榮業所基
宜令榮業所基
互令榮業所基

藉甚無竟學優
藉甚無竟學優
新古世之學優

(廿七)

登仕攝職從政
登仕攝職從政
登仕攝職從政

存以甘棠去而
存以甘棠去而
存以甘棠去而
存以甘棠去而

益詠樂殊貴賤
益詠樂殊貴賤
益詠樂殊貴賤
益詠樂殊貴賤

益詠樂殊貴賤
益詠樂殊貴賤
益詠樂殊貴賤
益詠樂殊貴賤

禮別尊卑上和

禮別尊卑上和

禮別尊卑上和

下睦夫唱婦隨

下睦夫唱婦隨

下睦夫唱婦隨

外受傳訓入奉

外受傳訓入奉

外受傳訓入奉

母儀諸姑伯叔

母儀諸姑伯叔

母儀諸姑伯叔

猶子比兒孔懷

猶子比兒孔懷

猶子比兒孔懷

(十一)

兄弟同氣連枝

兄弟同氣連枝

兄弟同氣連枝

交友投分切磨

交友投分切磨

交友投分切磨

歲規仁慈隱惻

歲規仁慈隱惻

歲規仁慈隱惻

造次弗離節義

造次弗離節義

造次弗離節義

(三)

廉退顛沛匪虧

廉退顛沛匪虧

廉退顛沛匪虧

性靜情逸心動

性靜情逸心動

性動情逸心動

(牛目)

神疲守真志滿

神疲守真志滿

神疲守真志滿

逐物意移堅持

逐物意移堅持

逐物之福堅持

雅操好爵自縻

雅操好爵自縻

雅操好爵自縻

都邑華夏東西

都邑華夏東西

都邑華夏東西

二京背芒面洛

二京背芒面洛

二京背芒面洛

浮渭據涇宮殿

浮渭據涇宮殿

浮渭據涇宮殿

盤鬱樓觀飛鷲

盤鬱樓觀飛鷲

盤鬱樓觀飛鷲

畚寫禽獸畫彩

畚寫禽獸畫綵

園寫禽獸畫綵

仙靈丙舍傍啓

仙靈丙舍傍啓

仙靈丙舍傍啓

甲帳對楹肆筵

甲帳對楹肆筵

甲帳呈楹肆筵

設席鼓瑟吹笙

設席鼓瑟吹笙

設席鼓瑟吹笙

升階納陞弁轉

陞階納陞弁轉

升階納陞弁轉

疑星右通廣內

疑星右通廣內

疑星右通廣內

左達承明既集

左達承明既集

左達承明既集

墳典亦聚羣英

墳典亦聚羣英

墳典亦聚羣英

杜稿鍾隸漆書

杜橐鐘隸漆書

杜彙鐘隸漆書

(11)

辟經府羅將相

辟經府羅將相

璧經方羅的如

路俠槐卿戶封

路俠槐卿戶封

路俠槐卿戶封

八縣家給千兵

八縣家給千兵

八縣家給千兵

高冠陪輦驅轂

高冠陪輦驅轂

為刻陰墀隨轂

(B+B)

振纓世祿侈富

振纓世祿侈富

振纓世祿侈富

車駕肥輕策功

車駕肥輕策功

車駕肥輕策功

茂實勒碑刻銘

茂實勒碑刻銘

茂實勒碑刻銘

磻溪伊尹佐時

磻溪伊尹佐時

磻溪伊尹佐時

阿衡奄宅曲阜

阿衡奄宅曲阜

阿衡奄宅曲阜

微旦孰營桓公

微旦孰營桓公

微旦孰營桓公

匡合濟弱扶傾

匡合濟弱扶傾

匡合濟弱扶傾

綺迴漢惠說感

綺迴漢惠說感

綺迴漢惠說感

武丁俊又密勿

武丁俊又密勿

武丁俊又密勿

多士寔寧晉楚

多士寔寧晉楚

多士寔寧晉楚

更霸趙魏困橫

更霸趙魏困橫

更霸趙魏困橫

假途滅虜踐土

假途滅虜踐土

假途滅虜踐土

會盟何遵約法

會盟何遵約法

會盟何遵約法

韓弊煩刑起前翦

韓弊煩刑起前翦

筭契以取起義

頗牧用軍寂精

頗牧用軍寂精

頗牧用軍寂精

宣威沙漠馳譽

宣威沙漠馳譽

宣威沙漠馳譽

丹青九州禹蹟

丹青九州禹蹟

丹青九州禹蹟

百郡秦并岳宗

百郡秦并嶽宗

百郡秦并嶽宗

恒岱禪主云亭

恒岱禪主云亭

恒岱禪主云亭

鴈門紫塞雞田

鴈門紫塞雞田

鴈門紫塞雞田

赤城昆池碣石

赤城昆池碣石

赤城昆池碣石

鉅野洞庭曠遠
鉅野洞庭曠遠
鉅野洞庭曠遠
鉅野洞庭曠遠

綿邈巖岫杳冥
綿邈巖岫杳冥
綿邈巖岫杳冥
綿邈巖岫杳冥

治本於農務茲

治本於農務茲

治本於農務茲

稼穡俶載南畝

稼穡俶載南畝

稼穡俶載南畝

我藝黍稷稅熟

我藝黍稷稅熟

我藝黍稷稅熟

貢新勸賞黜陟

貢新勸賞黜陟

貢新勸賞黜陟

孟軻敦素史魚
孟軻敦素史魚
孟軻敦素史魚
孟軻敦素史魚

秉直庶幾中庸
秉直庶幾中庸
秉直庶幾中庸
秉直庶幾中庸

勞謙謹勅聆音

勞謙謹勅聆音

方過作初於音

察理鑑貌辯色

察理鑑貌辨色

察理鑑貌辨色

貽靡嘉猷勉其

貽靡嘉猷勉其

形廓素狀勉其

祗植省躬譏誡

衽植省躬譏誡

衽植省躬譏誡

寵增抗極殆辱

寵增抗極殆辱

寵增抗極殆辱

近恥林臯幸即

近恥林臯幸即

近恥林臯幸即

兩疏見機解組

兩疏見機解組

兩疏見機解組

誰逼索居間處

誰逼索居間處

誰逼索居間處

沈默寂寥求古
沈默寂寥求古
沈默寂寥求古
沈默寂寥求古

尋論散慮逍遙
尋論散慮逍遙
尋論散慮逍遙
尋論散慮逍遙

欣奏累遣感謝
欣奏累遣感謝
欣奏累遣感謝
欣奏累遣感謝

歡招渠荷的歷
歡招渠荷的歷
歡招渠荷的歷
歡招渠荷的歷

園莽抽條枇杷

園莽抽條枇杷

園美抽條枇杷

晚翠梧桐早凋

晚翠梧桐早凋

晚翠梧桐早凋

陳根委翳落葉

陳根委翳落葉

陳根委翳落葉

飄飄遊鷗獨運

飄飄遊鷗獨運

飄飄遊鷗獨運

凌摩絳霄耽讀

凌摩絳霄耽讀

凌摩絳霄耽讀

(六十七)

翫市寓目囊箱

翫市寓目囊箱

翫市寓目囊箱

易輶攸畏屬耳

易輶攸畏屬耳

易輶攸畏屬耳

垣牆具膳飡飯

垣牆具膳飡飯

垣牆具膳飡飯

適口充腸飽飯

適口充腸飽飯

適口充腸飽飯

烹宰飢歎糟糠

烹宰飢歎糟糠

烹宰飢歎糟糠

親戚故舊老少

親戚故舊老少

親戚故舊老少

異糧妾御績紡

異糧妾御績紡

異糧妾御績紡

侍巾帷房紈扇

侍巾帷房紈扇

侍巾帷房紈扇

圓潔銀燭燁煌

圓潔銀燭燁煌

圓潔銀燭燁煌

晝眠夕寐藍筍

晝眠夕寐藍筍

晝眠夕寐藍筍

象牀弦歌酒燕

象牀弦歌酒燕

象牀弦歌酒燕

接杯舉觴矯手

接杯舉觴矯手

接杯舉觴矯手

(七十三)

頓足恍豫且康

頓足恍豫且康

頓足恍豫且康

嫡後嗣續祭祀
嫡後嗣續祭祀
嫡後嗣續祭祀

蒸嘗禘禴再拜
蒸嘗禘禴再拜
蒸嘗禘禴再拜

悚懼恐惶殘孽

悚懼恐惶殘孽

悚懼恐惶殘孽

簡要顧答審詳

簡要顧答審詳

簡要顧答審詳

骸垢想浴執熱

骸垢想浴執熱

骸垢想浴執熱

顛涼驢騾犢特

顛涼驢騾犢特

顛涼驢騾犢特

駭躍超驤誅斬

駭躍超驤誅斬

駭躍超驤誅斬

賊盜捕獲叛亡

賊盜捕獲叛亡

賊盜捕獲叛亡

布射遼丸嵇琴

布射遼丸嵇琴

布射遼丸嵇琴

阮嘯恬筆倫紙

阮嘯恬筆倫紙

阮嘯恬筆倫紙

鈞巧任鈞釋紛

鈞巧任鈞釋紛

鈞巧任鈞釋紛

利俗並皆佳妙

利俗並皆佳妙

利俗並皆佳妙

毛施淋姿工顰

毛施淋姿工噴

毛施汚姿工噴

妍咲年年矢每催

妍咲年年矢每催

妍咲年年矢每催

羲暉朗曜旋璣

羲暉朗曜旋璣

羲暉朗曜旋璣

懸斡晦魄環照

懸斡晦魄環照

狂解西院猗迥

指薪脩枯永綏

指薪脩枯永綏

指薪脩枯永綏

吉劬矩步引領

吉劬矩步引領

吉劬矩步引領

俯仰廊廟束帶

俯仰廊廟束帶

俯仰廊廟束帶

矜莊徘徊瞻眺

矜莊徘徊瞻眺

矜莊徘徊瞻眺

孤陋寡聞愚蒙

孤陋寡聞愚蒙

孤陋寡聞愚蒙

等語謂語助者

等語謂語助者

等語謂語助者

為我乎也

為我乎也

為我乎也

古久保年菴書



習字提要

執筆法

書ハ執筆ニ在リト申シマシテ書ヲ學ブ先ヅ第一ニ執筆ノ法ヲ心得ネバナリマセン。コノ執筆法ニ單鈎ト雙鈎トノ二法アリマシテ、食指ト中指ト大指ト大指ノ尖トデ筆管ヲ執ルヲ單鈎ト云ヒ。之レヲ總稱シテ撥鋒法ト申シマス。單鈎ハ小字或ハ假名書キニハ宜シイガ剛健嚴重ナル書ヲ作ルニハドウモ筆力ガ十分這入ラズ適シマセヌノデ、古來專ラ雙鈎ヲ用ヒラレテ居リマス。

ソコデコノ單鈎雙鈎トモニ腕法ガ、枕腕、提腕、懸腕、回腕ノ四法アリマシテ、其ノ枕腕トハ、左手ヲ案ニ置キ、ソレヲ枕トシテ、右腕ヲ其ノ上ニ置キテ書ク法デ、多ク單鈎デ小字ヲ書クニ用ヒラレ。提腕トハ肘ヲ案ニ着ケテ書ク法デ。コレハ小字中字ヲ書クニ用ヒ。懸腕トハ肘ヲ案ニ着ケズ宙ニ置キテ書スル法デ、コレハ多ク雙鈎デ、大字ヲ書クニ用ヒラレマス。回腕法ト

ハ拇指ノ尖ト食指ノ尖トニテ筆管ヲ固ク執リ、中指以下相接シテ環ノ如クシ肘ヲ高クカカゲ平カニシ、腋ヲ十分開張シテコレヲ圓曲ナラシメ、指頭筆管ト胸ト相對セシメテ書スルノ法デアリマス。

筆管ノ持チ所ハ楷書ヲ書クニハ筆頭ヲ去ル二寸一分。行書草書ハ三寸一分ヲ執ルベシト。衛夫人ノ筆陣圖ト云フ書物ニアリマスガ。元ヨリ文字ノ大小、筆管ノ長キ短キ太キ細キニ應ジテ便宜ニ從フベキデアリマス。執筆ノ法以上カク多種アリマスガ、何レモ筆ヲ垂直ニシ指頭ニ力ヲ籠メテ掌ヲ空虚ニシ掌中卵ヲ抱ヘ把リタル如クスルヲ法トシマシテ、コレヲ實指虛掌ト申シマス。即チ指實ナラバ筋力發揮シ、掌虛ナラバ運轉自在ノ故ニ外ナリマセン。尙ホ筆、指、掌、腕、全體ヲ筆ト心得テ書スベキデアリマシテ。指先ヲ運動セシムルハ大禁デアリマス。

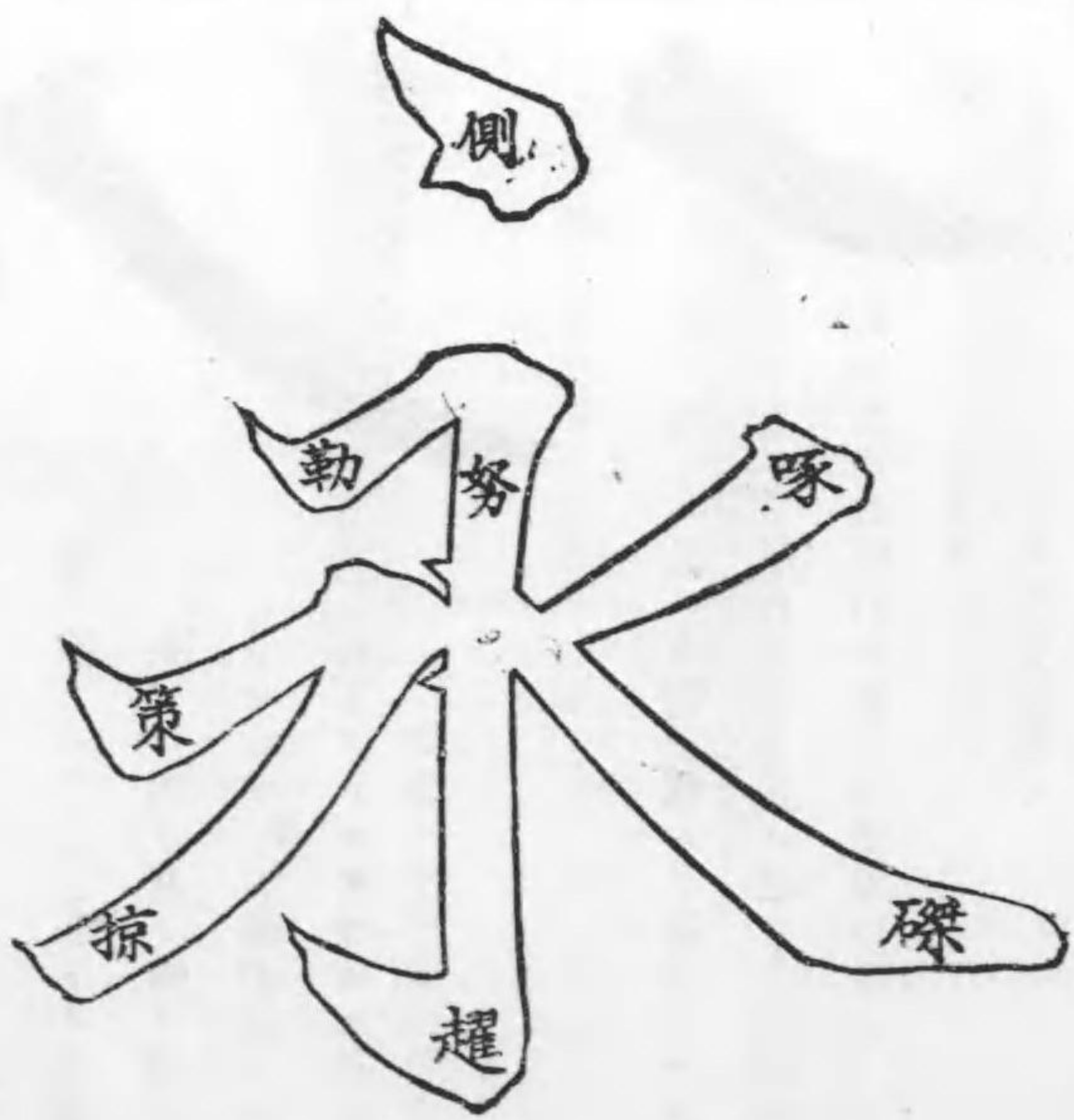
姿勢

姿勢トハ身體ノ構ヘ即チ坐リ方ノコトデ、案ノ高低ハ其ノ人々ニヨリ適宜タルベク。臀部ヲ落チ着ケ下々腹

ニ力ヲ充テ、案ニ向ツテ正坐相對シ、右ノ手、腕ニ全カヲ注ギ、左ノ手ハ唯ダ紙ノ動カヌ程ニ輕ク押ヘ。ソシテ點畫ノ結構ヲ心ニ得テ、一點一畫ヨク力ヲ盡シテ書クベキデアリマス。古人モ楮墨ヲ費サズ、孰觀閉目心ニ索ムト云フテ居リマス。沈着痛快毫髮モ遺憾無シトハ、コレ書道ノ極意デアツテ、運用精熟規矩胸中ニ暗ジ、手筆ヲ忘レ心手ヲ忘ル。然リ心閑手敏ノ境地ニ到達、即チ書ノ妙域デアリマス。

運筆法

古來永字八法トテ、永字ヲ一畫ヅ、二分チ。八種ノ筆法ヲ知ラシムルモノデ。永字ハ左右トモ力ガ同ジデアツテ、筆畫簡ヨク諸體ヲ備ヘ。一切ノ字ニ應用ガ出來。運筆法ノ捷徑デアルトシテアリマス。隋ノ僧智永ガ、處世南ニ傳ヘタ書法デアルトノコトデアリマス。



側—側トハソバダツデ。平正デハナラヌ意ニテ、鋒右ニ向ツテ入り。勢ハ左ニ向ク險シク挑ルコトニテ墜石ノ如シト。王右軍曰フ點ヲ作ルニハ皆磊々トシテ大石ノ衢ニ當ルガ如クナルベシトイフデアリマス。

勒—勒トハ横畫ノコトデ筆心ヲ以テ之レヲ
 壓スルナリ。筆ヲ下サントスルトキ、
 先ヅ右ヨリ左ニ廻ル一空畫ヲ作り、以
 テ紙ニ落スナリ。始メ平、中間仰ギ、
 終ハ偃ス。スウ—ト一氣ニ引カズ、溢
 勁タルベシ。衛夫人曰ク千里陣雲ノ如
 ク隱々然其ノ實形アリト云フテアリマ
 ス。

努—努トハ石弓ノコトデ平直ナルトキハ力無シ。
 曲勢ヲ帯ビ雄勁ナルベキデアル。衛夫人曰ク
 千年ノ古藤ノ如シト。

趯—趯トハ挑ルコトデアリマスガ、卒爾急速ニ挑
 出スハヨロシカラズ。溢勁快利其ノ利鋒及ノ
 如シトイフテアリマス。

磔—磔トハ徐ナラズ疾ナラズ。
 王右軍曰ク一波ヲ作ル毎ニ
 必ズ三折シテ過グ、徐行勢
 足リテ而シテ後コレヲ遲溢
 抜ク。磔トハ裂クトイフコ
 トデアリマス。
 サテコレ等ヲヨクヨク玩味
 工夫セバ總テノ文字ヲ書ク
 上ニ大ニ益スル所ガ有ルコ
 ト思ヒマス。

横畫ハ筆縦ヨリ入り、
 鋒ハ上部ヲ通ス。

策—策トハ仰ヒデコレヲ策ス。策トイフ
 字ハ鞭策ノコトデ。筆心仰舉ノ勢馬
 鞭ヲ打ツガ如クトイフテアリマス。

掠—掠トハ(スクフ)トイフ意
 味デ、須ク其ノ鋒ヲ迅ニ
 スベシデ、末鋒飛起スル
 ライフノデアリマス。

啄—啄トハ鳥ノ食物ヲ啄ムノ勢ヲイフタ
 ノデ、左ヨリ入り迅ニ之レヲ急廻輕
 勁筆力鐵石ノ如キヲ貴ブトイフテア
 リマス。

縦畫ハ筆横ヨリ入り、鋒ハ左側ヲ通ス。

懸針ハ筆ヲ落シテ而シテ後ニ引キ必ズ收スルト
 コロアルベシ。

垂露ハ即チ露ノ板面
 ヲ下ルガ如ク、筆縮
 マル所アルベキデア
 リマス。

筆畫ノ斷タレタルトコロハ
 筆意必ズ連綿タルヲ要ス。

北

筆畫ノ連リタルトコロハ筆必ズ斷ツコトヲ要ス。

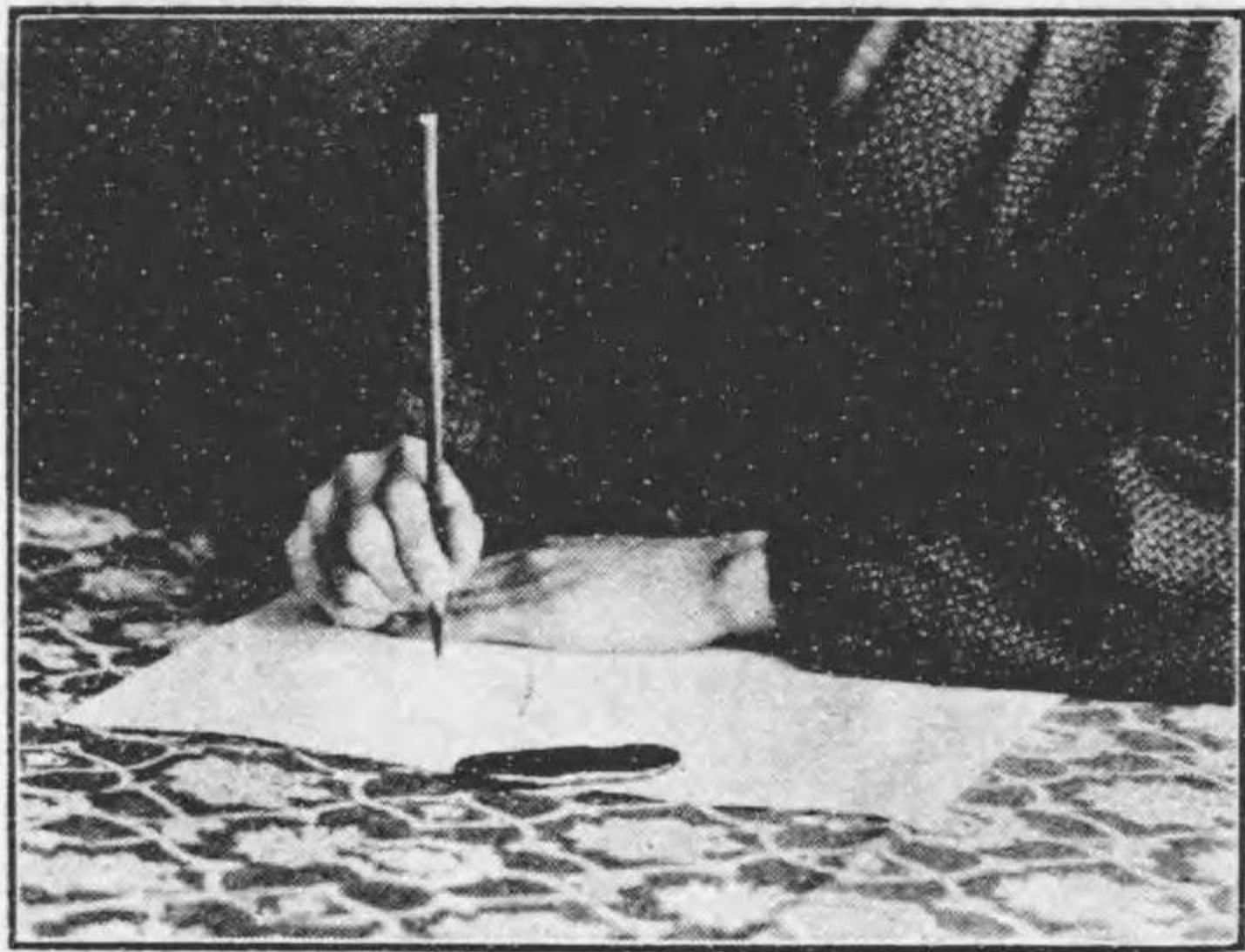


呼べハ
應ズル
ノ所、
意必ズ
連ナル。

背ムクトコロ。

張旭ニ十二意筆法、鍾繇ニ十二巧妙有リ。而シテ蕭子雲ニ亦十二法リ。皆大同少異。今子雲ノ法ヲ録スレバ即チ、一ニ曰ク潔、二ニ曰ク空、三ニ曰ク整、四ニ放、五ニ因、六ニ改、七ニ省、八ニ補、九ニ縱、十ニ收、十一ニ平、十二ニ側。或ハ間架結構、八十四法、九十二法、三十二勢。歐陽率更ニ三十六法、又八法ニ對スルニ八病ト云ヒ種々ノ要訣ガアリマスガ。畢竟字體ノ疎密、長短、大小、肥瘦、俯仰、向背、勁速、遲澁、頓挫、停頓等、皆字ノ組立、鈞合ヲ正シク調ヘシメンガ爲メノ故ニ縷々イフノデアリマシテ、即チ字中ニ筆有ル猶ホ禪家ノ句中ニ眼有ルガ如シト申シテアリマスコレラ諸法詮スルトコロ要ハ氣滿ノ二字ニ外ナラスノデアリマス。唐ノ孫過庭ガ書譜ノ數句ヲ摘出シテ參考ニ供シマス。

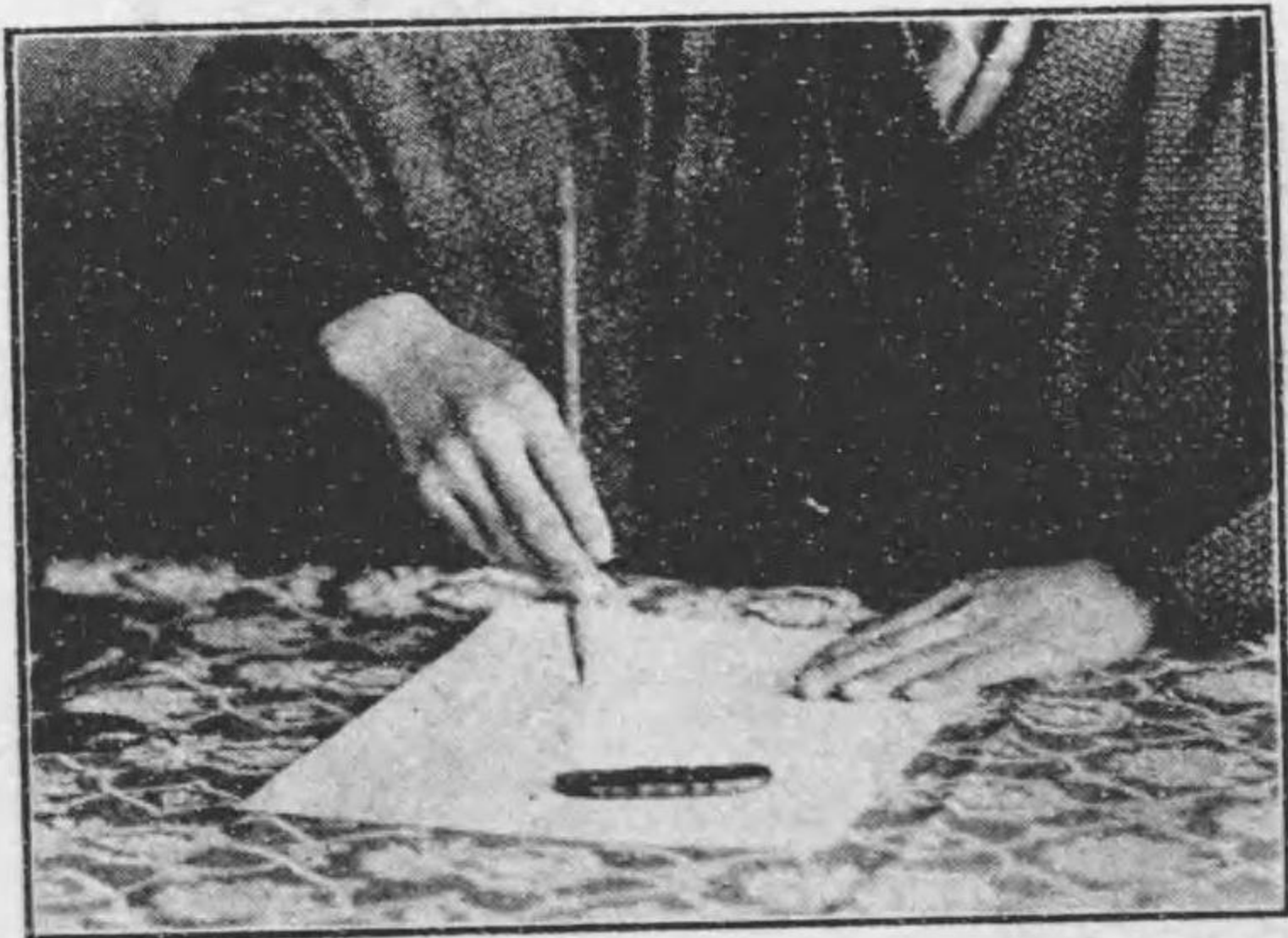
觀ニ夫懸針垂露之異。奔雷墜石之奇。鴻飛獸駭之資。鸞舞蛇驚之態。絕岸頽峯之勢。臨危據槁之形。或重若崩雲。或輕如禪絮。導之則泉注。頓之則山安。纖々乎似初月之出。天崖落落乎猶衆星之列。河漢同自然之妙云々



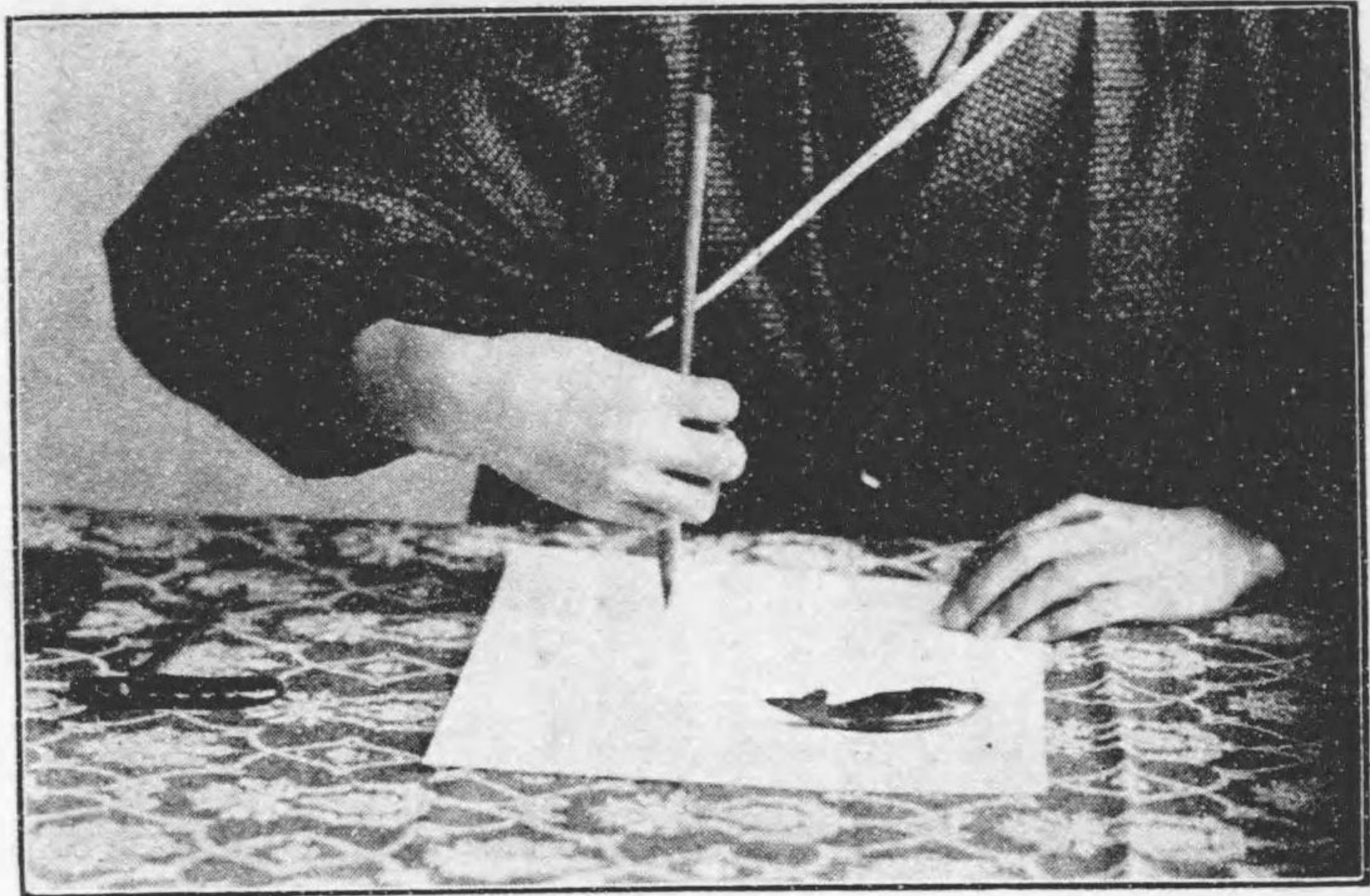
早鈞枕腕法 (第一圖)



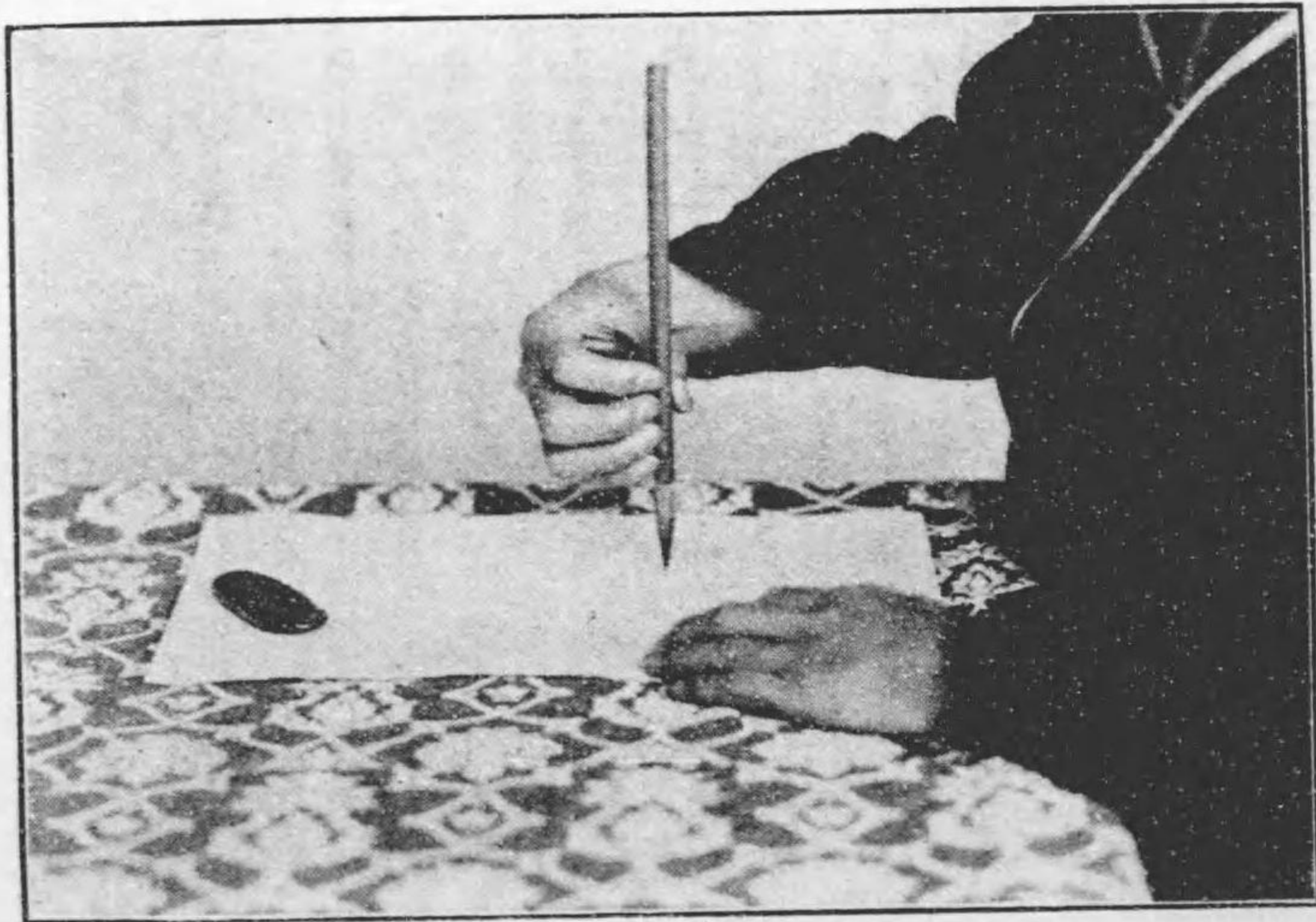
雙鈞提腕法 (第二圖)



雙鈞懸腕法 (第三圖)



(一ノ圖四第) 法腕回



(二ノ圖四第) 法腕回

點訓千字文註解

文字の右傍に附たる假名は音讀を示したるものにして、又左傍に附したるは訓讀乃ち普通の讀方を示せるなり。

勅員外散騎侍郎周興嗣次韻

天地玄黃 宇宙洪荒

天の色は玄乃ち黒く、地の色は黄乃ちきいろなり。宇宙とは大空乃ち天と地の間をいひ、洪荒とは共に大にして廣きなをいふ。此の二句及び以下八句は天文を説きたるなり。

日月盈昃 辰宿列張

盈とは満ることにて昃とは傾くことなり。日は中して西にかたむき、月出づれば漸くにかくるをいふ、又辰は天の十二宮、宿とは二十八宿にして共に星の座なり。日月と共に天に列り懸るをいふ。

寒來暑往 秋收冬藏

往は去ることなり、寒來れば暑去り、四時循環してかぎりなきをいふ、又秋に至れば春夏の候に種まき植えたるものを取り入れ收め、冬に至ればこれを藏し納るをいふ。

閏餘成歲 律呂調陽

古の曆はすべて月を本として作れるなり、すなはち四年に一度閏月をおきて歲を定め、をいふ、又律呂とは音樂の調子なるも、概して音樂のことをいふ、之を氣節に配して陰陽の氣を調へるをいふなり。

雲騰致雨 露結爲霜

地上の水氣大空に立ちのぼり雲となり、冷氣にあへば雨となりて再び地上に降り來る、又氣候漸冷かになれば空中の水氣は露となり、其の露が寒氣にあへば結はりて霜となるをいへるなり。

金生麗水 玉出崑崗

古へ支那にては、麗水と名けし河中より多くの沙金の出しにより、金は麗水より生ずといひ、又崑崗と稱する山中より水晶、琥珀、瑪瑙などの寶玉を多く産せしより、玉は崑崗より出つといへるなり。

劍號巨闕 珠稱夜光

古より世に知られたる、趙の國の名劍にて、巨闕と銘せしも、もとは地中より産出する鐵をきたひて作り又古より、世に稀れなる寶として稱ふる、夜光の珠も、同じ地中より掘り出せるものなるをいふ。

果珍李柰 菜重芥薑

果物は地に生ずる草木に實るものなるが、其の中にも李と柰を最も珍らかなるものとし、また野菜も種々多くあれども、支那にては、芥と薑とを第一として重んずるをいふ。

海鹹河淡 鱗潛羽翔

水には海の水と河の水とあり、而して海の水は、しほからく、河の水は、あはくして鹽氣を含みます、又鱗乃ち魚類は水中を潜みて住み、羽乃ち鳥類は空中を棲かとして飛びかけるをいふ。

龍師火帝 鳥官人皇

支那の上古伏羲氏の時に龍馬圖を負ふて出づ、因て伏羲氏を龍師といひ、燧人氏は民に火食を教へしより火帝と稱す、又鳥官は少昊氏の時に鳳凰出でてしより官に名け、人皇とは天皇地皇人皇の人皇氏をいふなり。

始制文字。乃服衣裳。

推位讓國。有虞唐陶。

弔民伐罪。周發殷湯。

坐朝問道。垂拱平章。

愛育黍首。臣伏戎羌。

遐邇壹體。率賓歸王。

鳴鳳在樹。白駒食場。

化被草木。賴及萬方。

蓋此身髮。四大五常。

恭惟鞠養。豈敢毀傷。

女慕貞潔。男效才良。

知過必改。得能莫忘。

罔談彼短。靡恃己長。

上古には文字なく繩を結びて約束又はしるしにせしが、蒼頡といふ人、鳥の足音を見て始めて文字を制作し、夫れより世は次第に進みて人皆衣衣裳を作り之れを服するに至れるをいふ。

前句の如く世の進むにつれて仁義道德の教えを重んずる様になり、聖人出でて位を推し國を譲りて世を治められたり、乃ち帝堯陶唐氏は舜を推して位に即かしめ、帝舜有虞氏は禹を擧げて國を譲られたるをいふ。

弔とは恤れみ慰むることにて、暴虐なる君を誅伐して人民を塗炭の苦みより救ひしことなり、乃ち殷の湯王は、暴君夏桀を誅し、周の武王發は、殷の紂王を伐ちて人民を助け安んぜしをいふ。

聖賢なる人君は、朝廷に坐して天下國家を治むるの道を臣下に問ひ諮りて政を行ひ給へるなり、されば衣を垂れ手を拱きて天下は自ら平らかに章らかに、治まれるをいふ。

聖賢とは蒼生といふに同じく萬民のことなり、仁君世を知しめして萬民を愛し、み育くみ給ふによりひいて戎卷とて西方の遠きエヒスの國々までも、其の徳を慕ひ來りて臣下となりて伏従せるをいふ。

遐とは遠きないひ邇とは近きないひ、仁君の徳化は遠近の別なく膏體に及びぬるを以て、普天の下率士の賓乃ち國土のはてまでもすべて王化に歸伏せるをいふ。

聖賢なる人君世を知しめさる、より天下は太平の瑞光として、鳳凰は來りて木にやどりて鳴き、白き駒は出て牧場に食む乃ち徳の禽獸にまでも及べざるをいへるなり。

斯くの如く國家治まり、人民安らかに、徳化は禽獸に及べざるのみならず、其の惠みの露は草木にも被り、其のさいはひは、引て宇宙の萬物にまでも及ぼせるをいふ。

蓋し此の身髮、乃ち我身體髮膚は思ふに父母より受けたるものなれども、四大乃ち地水火風の陰陽の和合より成り、一小天地を象とれるものなれば、五常乃ち仁義禮智信の道を守るべきなり。

されば恭しみ謹みて父母が此の身をばくみ養ひ給ひし大恩を思ひみては、豈に何として此の身體髮膚をきづつけやぶるなどの行ひありてなるべき、これ孝道の第一義なりといへるなり。

女乃ちすべての婦人は、貞操と潔白との行ひを慕ひて、苟くもこれに背かざらんことを期し、又男子は才能と善良とを手本としてこれにならひ、假にも悪しき行ひなからんことを戒しめたるなり。

凡そ人としては必ず過ちなきを保し、されば若しも過ちと知りたるならば、必ず速かにこれを改めざるべからず、又能とは人の必ず行ふべき道にて、これを知り得たらに決して忘るべからざるをいふ。

彼とは己れを除きて他のすべての人ないふ、たとへ他人の短所を知りたればとて、必ず其を己れの口より言ひ觸らしてはならぬ、又己れの長けたると、乃ち得意とするを自慢するとはならぬと戒しめたるなり。

信使可覆。器欲難量。

墨悲絲染。詩讚羔羊。

景行維賢。克念作聖。

德建名立。形端表正。

空谷傳聲。虛堂習聽。

禍因惡積。福緣善慶。

尺璧非寶。寸陰是競。

資父事君。曰嚴與敬。

孝當竭力。忠則盡命。

臨深履薄。夙興溫清。

似蘭斯馨。如松之盛。

川流不息。淵澄取映。

容止若思。言辭安定。

信とは眞實なり、一旦人と約したることは必ず實行すべからしむ可きを期すべし、又器とは器量なり、己れの器量を他人に見すかされてはならぬ、奥床しければ他の畏敬を受くるといへるなり。

むかし墨子といへる賢人は、白き糸の種々の色に染るを見て悲み泣けり、そは人も無き友に交れは悪しき行ひに染るを歎きたるなり、又詩の羔羊篇は、周の文王の徳の南國に及べざるを稱讃せしなり。

景とは大なるなり、明らかなるなり、明らかに大ひなる行ひある人は必らず維れ賢人である、又よく古への聖人の言行を思ひ鑑みて、念々忘れされば、其の人も亦た聖人となるを得べしといへるなり。

人が徳行を建つれば、其の行ひ自ら世に知れ、隨つて其の名も亦た著はる、乃ち其の形乃ち容姿が端正なるときは、其の表乃ち影も正しく映る如しといへるなり。

たとへて言へば、空谷に於て聲を發すれば、ただまとなりて其の聲を傳ふる如く、又何物もなき廣き堂にて、音を發すれば、其の響は滿堂に聞ゆる如しといへるなり。

人の福善を被むることは、己れが惡しき行ひの積りし結果なれば、日常惡しき行ひなきやう慎まねばならぬ又幸福の來るも善事を行ひたる賜ものなれば、勉めて善き行を爲すべしといへるなり。

一尺もある程の玉は、世に稀なれるものなれど、決して貴ぶべきものではない、寧ろ寸乃ち僅かなる光陰を惜みて、怠らず勉め勵めば、百事成らざることなし、是れこそ眞の寶と謂ふべきなり。

我が父母に事ふるの道を以て君につかふまつるべし、必ず世に忠臣と稱せらるべし、これは孝經より取りたる句なり、乃ち君に事ふるの道は、おごそかにしていづくしむとやまふとにあるなり。

孝とは如何なる行ひかといふに、論語にも言へる如く、己れの力の及ぶ限り父母の教訓を守り法に背かず行ひを正しくして奉養するをいひ、忠とは則ち身命を抛ちて君命を重んじ奉仕するをいふ。

忠孝の道は、容易ならぬことで、宛も深き淵に臨むが如く、薄き氷を履むが如く、小心翼々と謹み慎みて行はねばならぬ、たとへば朝早く起きて君父の安否を伺ひ、冬はあたたかにし、夏は清涼ならんことに注意す

上來述ぶるが如く忠孝の道を盡さんには、たとへば蘭の幽谷に生じて芳香を放つが如く、又松の蒼々として青く、丁々として高く、枝葉繁茂して盛んな如く、人に慕はれ仰がるべしといへるなり。

しかし忠孝は一旦の行ひを以て足れりとするべからず、川の流れて千古息む時なきが如く、終生慮ることなかるべく、又淵の水澄めば萬の影の映るが如くに、飾りなく眞心を盡して行へといへるなり。

人はすがたかたちの端正にして優美なるを思ふ、されど思ふばかりではならぬ、其の思ふが如く端正優美ならざるべからず、而して又ことばは安らかに靜かにして、決して輕躁ならぬやうにせよといへるなり。

篤初誠美 慎終宜令
 榮業所基 籍甚無竟
 學優登仕 攝職從政
 存以甘棠 去而益詠
 樂殊貴賤 禮別尊卑
 上和和睦 夫唱婦隨
 外受傅訓 入奉母儀
 諸姑伯叙 猶子比兒
 孔懷兄弟 同氣連枝
 交友投分 切磨箴規
 仁慈隱惻 造次弗離
 節義廉退 顛沛匪虧
 性靜情逸 心動神疲

一事一業を爲すには、必らず其の初めに篤く注意を加ふれば、其の事業は誠に美しく成らん、又其の初めの
 みでなく、終りを慎みて鄭重にするときは、其の結果は善良なるべしといへるなり。
 榮業とは、官途に就くことなり、以上述べたる如く身の行ひを正くすることは、乃ち高位高官に上るの基
 である、さすれば名聲籍甚とて、其の譽れは終りなく限りなく傳へらるべしといふ。
 學問が衆人に優れたる人は、仕乃ち官途に就くことが容易でありて、遂には重要な職を執り、國政に従ふ
 の高位高官に昇り得らるべしといへるなり。
 斯くの如くなれば、此の世に生存する間は、古へ周の邵公が甘棠の下にて政を聽き、萬民其の德惠に浴した
 るが如く、又死して後は詩經の甘棠勿伐の句の如く益其の德を謳歌せらるべきなり
 古へより音樂には、天子、諸侯、士大夫、庶民と種々區別あり、各其の分によりて樂しみ、又冠、婚、喪、
 祭などの禮式も、それ／＼貴賤上下の別ありて、整然として訓へり。
 天下平らかに國家よく治まり、人君は臣民を愛くしあはれみ、臣氏は君主を尊み敬ひて上下和らぎ睦ひ、
 又一家にありては、夫たる男子の命令に、婦たる女子は能く服従して和合するをいふ。
 傅とは、守符のことにて猶ほ家庭教師の如きをいふ、外に出ては傅師の訓へを受けてよくこれを守り、又家
 にありては母の教えを奉じてこれに違ふべきなり、儀とは範といふに同じ。
 父の姉妹を姑力(は)ち(は)といひ、父の兄弟を伯叔(は)ち(は)ち(は)といふ、すべての「をち」「をば」のことなり
 又猶子とは、兄弟の子をいふ、兄弟の子は猶ほ子の如しといふより、すべての「をひ」「をい」をいふ
 「めい」は猶ほ我子の如くに愛くしめといふなり。
 孔は、「はなげだ」にして別段の意なり、兄弟は特別に親しみ愛くしむべし、何となれば同じく父母の氣を
 受けたるものにして、たとへば多くの枝葉の一本の幹より分れたるが如く、一身同様なるべきをいふ。
 常に交はる友は、其の分に應じて意氣の相合ふものを擇むべきなり、而して相共に切するが如く磨するが如
 く、文學技藝を研き勵みて、互ひに其の言行をいましめたすべきをいふ。
 人たるものは常に他を愛くしあはれみみて情け深く、他の難儀を見てはこれをいたみ慰めて救ひ助くること
 謂ゆる同情にあつかるべし、又造次とは暫しの間をいふなり寸時も此心に乖き離るべからざるべきをいふ。
 節義とは、みよきを守り義理を重んずると、又廉退とは直くして利欲に惑はす人へりくだり讓ることにて
 意志の堅くして正しきないひ、顛沛とは物の倒るゝ間乃ちつかの間も此の心を虧くべからざるをいふ。
 人の性質おちつきて靜かなるは、其の情ものびらかに自から安らかなるべく、又之れに反して心定まらず動
 き易きは、其の心も亦た輕躁になり、隨て精神も疲れ勞るゝをいふ。

守眞志滿 逐物意移
 堅持雅操 好爵自縻
 都邑華夏 東西二京
 背邨面洛 浮渭據涇
 宮殿盤鬱 樓觀飛驚
 圖寫禽獸 畫彩仙靈
 丙舍傍啓 甲帳對楹
 肆筵設席 鼓瑟吹笙
 升階納陛 弁轉疑星
 右通廣內 左達承明
 既集墳典 亦聚群英
 杜藁鍾隸 漆書壁經
 府羅將相 路俠槐卿

人道の眞を明らかにめ身の本分を守らんには、意志も固らかに満足せらるべく、又事物の變遷を見てそれに感ひ
 動かさるるものには、意志も常に移り變りて定らず、到底事業を成し遂げ難きをいふ。
 堅く正しきみよきを、保ち守り、此の美德を離さざるべきは、自然と世に知られ人に尊敬まはれて、求めず
 して好き官爵にも偏はり、欲せずして富貴も自から來り身にもまはるべきをいふ。
 都邑とは、都會繁華の市をいふなれど、こゝには單に「クヤ」「クヤ」乃ち王城の在る所をいふ、華夏とは支那人が
 己の國を自尊していへるなり。又東西二京は、洛陽と長安の二つの都をいふ。
 東の都は、北は北邨山を負ひ、南は洛川に臨む、故に洛陽と稱し又西の都長安は、渭水に面し涇川に據りて、
 兩京共に地勢は山河帶の好位置を占めたる有名なる王城なり。
 帝都洛陽及び長安に遺營せられたる宮殿は、盤桓とひるがり、鬱乎と建て列なり、其の中の樓觀乃ち高き物
 見應は遙かに高く聳え立てられ、人をして空中に飛べるか驚かしむ。
 さて其の宮殿の梁及楹などには、鳥けもの形を寫して彫り刻み、又其の棟や障子の如きも神仙の像を極彩
 色もて畫きたる等其の構造の莊嚴なるを稱讃せるなり。
 而して又丙舎とて、宮殿の内にある或る家の如きは、門の飾をひらきて其の小家より出入せしむる様に造ら
 れ、又甲帳乃ち美しくしきとより金玉を飾めたる柱 對して、其の裝飾の美麗いはんかたなし。
 斯の如き莊嚴なる宮殿に於て、時に筵を布きのべて席を設けて宴を賜はるゝあり、其の際には、瑟乃ち大
 なる「こと」を弾き鳴らし、又笙といへる笛などを吹きて歡樂を添へしむるなり。
 召に應じて參する諸侯百官は、階を升り陛を上りて宮殿内に入るもの引きも切らず、其の參列せしを見れば
 孰れも綺羅を飾り、弁乃ち冠りの輝くさまは、さながら天上の星かと疑はるゝなり。
 而して其の宮殿の廣大にして建て列なれる、右すれば廣内といふ宮殿に通じ、左すれば承明と名けたる宮殿
 に達するなり、此の二句は其の廣大なる一斑を示せるなり。
 又此の宮殿内には、既に三墳五典などいへる古き書物を夥多しく寄せ集められ、夫れのみならず古今東西の
 世にすぐれたる多くの物をも集め納められたり。
 漢の丞相杜操ははじめて草書を作り、魏の太僕鍾隸ははじめて隸書を作れり、乃ち此等の珍書のみならず漢の
 靈帝が石櫃の中より得たる漆にて書きたる書、孔子の壁中より得たる六經までも藏せられたるをいふ。
 又政府には、天下に名を轟かせる良將、人民其の德を慕へる賢相をはじめ百官羅り列りて政を執り 路には
 三公九卿の車馬絡繹とならび續けるをいふ。

戸封八縣。家給千兵。

一戸の家給として八縣の土地を宛て行ひ、其の功勞傳動に報ひ、又功勳ある人の家には千人の兵士を給ひて守護附隨せしめ、其の所屬として指揮せしむるなり。

高冠陪輦。驅轂振纓。

高位高官の臣は、きらびやかなる衣冠を着けて、天子の鳳輦に陪從し、轂乃ち車を驅せ走らせて冠の紐を振り、意氣揚々として供奉す。其の儀仗の盛んなるを形容するなり。

世祿侈富。車駕肥輕。

祿を世々にするとは、父祖に給はりたる家祿を承け継ぐをいふ、其の爲めに家は富み榮えて侈りに長じ、其の乗る所の車馬は肥え太りて、着る所の衣裳は輕やかに、華美なる状をいふ。

策功茂實。勒碑刻銘。

斯くの如くに功勳ある人々の富貴を極むるを見ては、勳功傳動を立つるもの多く出て来る、又功勳ある人は生前富貴を極むるのみならず、死して後には之れを碑石に刻みて後世に傳へらるるなり。

磻溪伊尹。佐時阿衡。

磻溪は、古へ周の文王を輔佐したる太公望の嘗て釣を垂れし處、伊尹は殷の湯王の臣にして官は阿衡(後の巫相と同じ)に至る、共に暴戻の君を亡ぼして時の人民を助けたる賢人なり。

奄宅曲阜。微旦孰營。

曲阜とは周の地名なり、周公且は武王を輔佐して殷の紂王を伐ち、此處に大なる宮殿を建て周八百歳の其を開きしなり、もし周公且なかりならば、何人か此の經營を爲すことを得べきぞといへるなり。

桓公匡合。濟弱扶傾。

其の後、齊の桓公は、周の諸侯伯をただし合せ、自ら其の弱者となりて、周の天子を輔佐して天下を治めんとし、貧弱なる國をすくひ助け、傾き倒れんとする諸侯を興されたるをいふ。

綺回漢惠。說感武丁。

綺里季は漢の四賢の人なり、惠帝が未だ太子たりし時、殆んど廢せられんとせしを諷諭して回復したるなり。又殷の傅説は、高宗武丁が夢に感じて政務を托せられたる忠良の臣なり。

俊乂密勿。多士寔寧。

俊乂とは才智の捷詳なる人、密勿とは親しみ用ゆるの意なり、聖賢なる君は、才智捷詳なる人物を撰抜して親任せらるるが故に、濟々たる多士とて、人材多く集り政を執るを以て、天下まことに安寧靜謐なり。

晉楚更霸。趙魏困橫。

天下亂るゝに及んでは、人道漸く衰へ、天子は在れどもなきが如く、彼の晋と楚の兩國が、かかると覇業を争ひ、又趙と魏は合縱の策を講じて秦に抗せしも、反つて秦の連横の計に苦しめられたり。

假途滅虢。踐土會盟。

晋の献公の如きは虞の國を征すとして、道を虢の國にかり、虞を討ちて歸るとき、遂に虢を亡ぼしたり、又晋の文公は、踐土に諸侯伯を會し、相一致して周の天子を敬ひ朝貢を怠らざらんことを盟ひしも、終に行はれざりしなり。

何遵約法。韓弊煩刑。

漢の高祖が天下を定めし時は、蕭何之れを輔佐して、秦の苛法を除きて法を三章に約して國治まれり、然るに韓非は秦の相たる時、様々の苛酷なる法令を布きしかば、其の煩はしき爲に政は廢れ國はつかれたるなり。

起勦頗牧。用軍最精。

起は自起にして剪は王剪なり、共に秦の將軍たり、又頗とは廉頗をいひ牧とは李牧をいふ、此の二人は趙の將軍なり、此の四人は軍略に長じ用兵に最も精しく、世にすべられたる名將なりしなり。

宣威沙漠。馳譽丹青。

されば此等の將軍は、其の威名は普く四海を轟かし、武勳は天下にかまやましのみならず其の像を畫かれ其の功績を記されて、譽れを後世に傳へられたるなり。

九州禹跡。百郡秦并。

九州とは支那古代の本土にして、冀、青、徐、揚、兗、荆、豫、梁、雍の九州をいふ、禹は此の九州を巡りて水利を治り農業を勤めて天下を治められたり、秦の始皇が天下を一統するに至り國を百郡に分たれたり。

嶽宗恒岱。禪主云亭。

嶽とは山なり、乃ち山は恒山と岱山となつとぶ、謂ゆる天下の名山となしてたつとび、又封禪の地として、云、山と亭々山を主となしたり、これより以下八句は支那古代の地理形勢を示したるなり。

鴈門紫塞。雞田赤城。

鴈門とは山の名にして、鳥も越えかぬるといへる高山なり、紫塞は萬里の長城にして、其の色よりして稱せらる、又雞田とは古驛の名にして、赤城は周時代に關門のありし所なり。

昆池碣石。鉅野洞庭。

昆池とは、昆陽と稱する有名なる池にして、碣石は著名なる山なり、又鉅野とは、鉅鹿と稱する所の廣き原野にして、洞庭は楚の國と吳の國とに間にある湖水の名なり。

曠遠繇邈。嚴岫杳冥。

以上の原野、湖水其他名所古蹟など、ひろく遠くはるかに連り、又嚴岫乃ちけはしく高き大なる山々は遙かに遠く散在して、幽かに見ゆるが如く見えぬが如くなるといふ。

治本於農。務茲稼穡。

天下を治むるの要素は農は以て本とす、乃ち農は國を立つる基礎なるが故に務めて稼穡の道を怠らざらんことを期するをいふ、蓋し稼とは植ること穡とは收むることなり。

俶載南畝。我藝黍稷。

俶は始めてなり、乃ちはじめて日あたりより南向きの田畝に耕作して、我は「きび」や「あは」などの穀物を種まきうへて、農業を勉め勵みて怠らすといへるなり。

稅熟貢新。觀賞黜陟。

さて其穀物が實り熟したならば、其の幾分を租税として納め、其の新しきを貢として奉ること、これ農家の務めなり、されば上は其の業を勸め勵ますに賞を以てし、其の勤怠によりて或は位をさげ又はしりぞくるなり。

孟軻敦素。史魚秉直。

軻は世に名高き賢人孟子の名なり、孟軻乃ち孟子は、其性質厚くしてすなはなる人でありて、又衛の太夫史魚は、秉直とて少しもまがりたる心なき至つて直き人にてありしなり。

庶幾中庸。勞謙謹勅。

中とはかたよらぬこと、庸とは常にしてかはらぬことなり、この中庸ならんことを希ひ望みて之れを得、又勞謙とは、もつぱら人にへりくだりゆづり、謹勅乃ち其の言行をつしみて、方正實直なるなり。

聆音察理。鑑貌辨色。

其の音聲を聞きて其のすぢみちを察し知り、又其の容貌を見て喜怒哀樂の情を辨別するなり、乃ち何事にも注意を怠らすして、是非善悪を見別げよとの意なり。

貽厥嘉猷。勉其祗植。

嘉猷とは、よきはかりことなり、人道を守りてよく一家を經營するの計畫を子孫にのこし、又常に仁義忠孝の道を守り、勉めて身を立て家を興すべしとの教えなり、祗はつしむ、植は立つことなり。

省躬譏誠。寵增抗極。

殆辱近耻。林臯幸卽。

兩疏見機。解組誰逼。

索居閑處。沈默寂寥。

求古尋論。散慮逍遙。

欣奏累遣。幟謝歡招。

渠荷的歷。園莽抽條。

枇杷晚翠。梧桐早凋。

陳根委翳。落葉飄颻。

遊鷗獨運。凌摩絳霄。

耽讀翫市。寓目囊箱。

易轡攸畏。屬耳垣墻。

具膳餐飯。適口充腸。

自からかへりみて過ちなきやと心がけ、事と物とに注意して慎しむべし、君の寵愛増すときは、他の嫉み妬みを受け、遂には讒誣せられて無實の咎を蒙るることあるべきなり。

君の寵愛いやまして高位厚祿を給はるときは、他のれたみを受け冤罪に陥しれらるゝも計られず、されば斯る光しあらは、速に身を退きて山林に隱遁せよといへるなり。

古へ疏廣、疏受といへる賢人あり、父の疏廣は足るを知れば危ぶべからずといひ、子の疏受は功成り名遂ぐといひて隱遁せり、斯く機を見て冠の解組を解き去らば、誰れかまた之れを讒し之れを陥しれんとするものあらんといへるなり。

斯くして住居を閑靜なる所にもとめ、富貴榮華にあこがれずして、世上の交りを絶ち世事にたづさはらずしてあらば、人と争ひを生ずることなく、のどかに樂しく世を送らるなり。

而して古人の書を讀み、古人の道を探れてそをあげつらひ、其の眞理を究めんには、世の煩さき交りもなくなり、隨て心を勞はすにも及ばず、天真瀟灑の樂みを得らるべきなり。

か、れば心は常にたのしくして欣喜の情は内心に動き、世故のわづらひはいつしか皆な去りつくすべし、されば悲しみ憂れるなどの事は其の身より謝し去り、たゞ喜ばしき事のみ招かすとも自から來るべきなり。

渠とは溝のことなり、荷は蓮なり、みぞの中に咲たる蓮も、鮮かに美はしく、圃に生ずる莽乃ち雜草も、枝のゆきんでたるときは、青々と清らかなり、蓋し泥中の花も、圃内の雜草も強ち捨つべからざるをいふ。

枇杷は、さまで見どころなきものなれども、其の葉は冬に至るも色うつるはすして綠なり、又あなざりはずぐれて大なる葉なれども、他の木よりは早く凋み落つるものなり。

古き根はすたれしはみ、おち葉は風にひるがへる、以上六句は、人世の榮枯盛衰一様ならず、富貴も羨むべからず、貧賤も侮るべからざるを諷諭せるものなり。

鷗とは、莊子にいふところの空中をかけり舞ふ大なる鳥の名なり、此遊鷗は他の鳥類と離れて獨り大空を遊び運り、萍蓬乃ち日の暮方の赤き空を渡りて高く飛びかけるさまをいふ。

出ては、古しへ王氏が市に出て、書肆の店頭にて讀書にふけりし如くし、入りては、眼を書籍を納めたるふくろや箱に寄せて、ひたすらに文學を研究して他を顧みず、蓋し學に志すものは斯様に勵むべしといへるなり。

易轡とは輕率なることにて、すべて事に臨みて深思熟考して、輕忽をなすを戒むべし、又諺にも壁に耳ありかきに目ありといへば、人無きところにも宜しく言行を慎むべしといへるなり。

飲食するには、必ず膳をそなへて禮儀たしくすべし、又食物は美味を擇むやうな贅澤を爲すべからず、口になひ腸に滿ちて、飢渴を凌ぎ得れば足れりと思ふべきなり。

飽飫烹宰。飢厭糟糠。

親戚故舊。老少異糧。

妾御績紡。侍巾帷房。

紈扇圓潔。銀燭烽煌。

晝眠夕寐。藍筍象床。

絃歌酒讌。接杯舉觴。

矯手頓足。悅豫且康。

嫡後嗣續。祭祀蒸嘗。

稽顙再拜。悚懼恐惶。

賤牒簡要。顧答審詳。

骸垢想浴。執熱願涼。

驢騾犢特。駭躍超驤。

誅斬賊盜。捕獲叛亡。

我人ともに充分飲食したるときは、たとひ美味珍羞たりとも飽きて食ふことを欲せず、又これに反して飢えて空腹なるときは、糟糠の如き粗食にてもいとす喜びて食するをいふ。

親戚家族ならびに故き知合ひは、互ひに往來音信して其の交情を温め親密なるべく、又老人と少年とは其の食事を異にするべきものなり、これは貴賤老若各其の分を守るべきをいへるなり。

妾とは、「そはめなり、御とは取扱ふことなり、妾は妻より賤しきものなれば、糸をとり糸をつむぐことを取扱ふべく、又侍乃ちそばがへの女は、帷（とばり）房（へや）などを掃除するが役目なり。

紈扇とは絹にて張りし扇子にして、其の形は丸くして清らかなるものなり、熱ければこれにて涼を納れ、又白かれの燭臺に火を點すれば、室内は光りまばゆかやき渡りて晝の如くなり。

晝寝むくれば眠り、夜れむければ寝れ、しかも眠り或は寝れるには、青竹にて作れる寢臺或は象牙をもて飾りたる寢床を用ひて、安らかに眠り又寝ることなり。

絃とは琴などの絲を弾きて鳴らす樂器をいふ、時してに樂を奏し詩歌を吟唱して酒宴を催ふし、互ひに杯をまじへ又觴をあげて酌分交し遊び興するをいふなり。

酒宴遊興の間には、或は手をさげたり足をあげたりなどして舞ひ踊りて歡樂を爲す、されば色よるこび心たのしくして且つやすらかなるをいふ、以上十數句は富貴にして一家團樂の樂しきを盡すのさまをのべしなり。

嫡とは、正妻の長子にして惣領息子なり、父の後を嗣ぎて一家を相續するものなり、されば四時に怠らず祖先の祭典をつとむべし、其の祭典は、春は禴、夏は禘、秋は嘗、冬は饋といふなり。

稽顙とは、頭を地につくることなり乃ち祭典の時には、頭を地につけて再び拜をなし、をそれみく、をそれれみかして、祖先の功勞を拜謝し、眞心もて之れを營むべきものなるをいふ。

賤牒は共に紙のことなり、されど此處にて手紙をいふ、すべて手紙を認むるには、くだくしからぬやう、手短かに其の要を摘みて書くべし、去りながら訪ひおとづれの文は、委しくつまびらかに認むべきなり。

骸とは身體のことなり、身體垢つけば湯あみして洗ひ清めんことを思ひ、又あつきにおほはるときには涼氣を納れんことを願ふ、これ人情の自然にして免れがたき所なり。

驢は「うさぎうま驢は小さき馬、犢は「こうし」特は豕の兒なり、又駭は「おどろき」躍は「おどる」超は「こへる」驤は「あがる」なり、これ等すべての家畜は、斯くして遊び戯れつゝあるをいふ。

すべて人を害ひ、物を奪ひ盜みなどする兇惡なるものを斬りこらし、又君に背ける叛反人或は惡事を爲せる逃亡人などは、悉く捕へてそれ／＼刑罰に行ふべきなり。

310
544

終

